

シンガポールにおける 1950 年代までの団地生活

滋賀大学

鍋倉 聰

1. 目的

本報告は、シンガポールにおける 1950 年代までの団地生活を取り上げることで、「総団地化社会」を実現して久しい現在のシンガポールから敢えて距離を取り、団地を舞台に展開している国民と国家のせめぎ合いを相対化することによって、国民国家をめぐる様々なせめぎ合いの一端を明らかにする。

シンガポールは、人口の 82%が HDB (Housing and Development Board=住宅開発庁) という団地当局の下にある公共住宅団地に住まなければならない「総団地化社会」である。このことによって、シンガポール政府は国家権力を日常生活の細部に至るまで及ぼすことが可能になり、実際に及ぼすことで一元管理社会を築いてきた。この結果、国民と国家の間のせめぎ合いが団地を舞台に日常生活の細部に至るまで展開することとなっている。

本報告では、1960 年の設立から団地当局として総団地化を強力に進めた HDB から敢えて距離を取るべく、その前身機関であり HDB 以外の唯一の団地当局であった SIT (Singapore Improvement Trust=シンガポール改良信託) による団地開発とその団地 (SIT 団地) での 1950 年代までの団地生活について、HDB がまだ存在しなかった当時の資料を詳細に取り上げることで社会学研究を進める。

2. 方法

SIT に関する研究や資料が乏しい中、有用な資料として挙げられるのが、現地紙のほか、SIT が毎年発行していた詳細な年報 (*The Works of Singapore Improvement Trust*) (SIT 年報) である。本報告では、SIT 年報を読み解いた上で現地紙と照合させることによって、SIT による団地開発の仕組み、SIT と団地住民との間の相互作用、団地住民の団地生活の一端を明らかにする。現地紙としては、シンガポールを代表する新聞で唯一あり続けて現在に至る *The Straits Times* 紙を用いる。

3. 結果

1950 年代までのシンガポールでは、以下のような変遷をたどる中で団地生活が営まれていた。

- ・戦前の SIT=部分的な改良を主とした時代
- ・戦後 1948 年から 1952 年までの SIT 団地=ティオンバル団地を中心とした時代
- ・1953 年から 1954 年までの SIT 団地=クイーンズタウンというニュータウン開発の開始
- ・1955 年から 1958 年までの SIT 団地=HDB の下地
- ・1959 年の SIT=SIT の末期から HDB へ

4. 結論

本報告で明らかにできることとして、以下の点が挙げられる。①HDB が総団地化社会における唯一絶対的な存在として全てを規定する文脈において専らネガティブに捉えられてきた SIT が、時代によって興味深い変遷を遂げ、その変遷が HDB の先駆けとして重要な役割を果たしていたこと。②SIT 当局とのせめぎ合いを通して、団地住民が団地生活という生活スタイルを築く第一歩を標していたこと。③こうした団地生活のスタイルは、1965 年のシンガポール共和国の独立を経て総団地化社会が成立して久しい現在に至る過程で、多人種社会において敢えて人種を問わないシンガポール人の団地生活スタイルの原点となっていることを示し得ること。④SIT 団地に関する社会学研究を進めて総団地化社会を相対化することによって、国民国家をめぐる様々なせめぎ合いの一端を社会学研究を通して明らかにすることが可能になることである。

文献

- 鍋倉聰、2011、『シンガポール「多人種主義」の社会学：団地社会のエスニシティ』、世界思想社
 鍋倉聰、2015、「シンガポールにおける「総団地化社会」成立の諸過程に関する社会学研究に向けた一考察：シンガポール改良信託団地から」、『彦根論叢』404 号